

客間の明かり

桐生倶楽部拝見

⑤

擬った内装の4号室と6号室に挟まれたシンプルな5号室。両隣の部屋に通じる扉があるから、控えの間として使われてきたのだろうか。段違いの窓のカーテンを開けると、別館の赤瓦の屋根が現れる。住み慣れた街にいるはずが、どこか知らない異国の土地、あるいは過去に

「5号室」



窓の向こうは、異国の風景

タイムスリップしたような気分させられる。

講談社の野間清治の紹介で、米国のコンクールで入賞経験を持つ清水巖が担当した建物。1919年に完成した当時、この一帯はいまより見晴らしがよく、桐生駅から本町通りに向かうと、この洋館が自然と目に入ってきたという。「外から客人を迎えたとき、桐生にはこんなすごい建物があるんだと、誇らしく思ったものだよ。倶楽部会員の一人、バイオリニストの筈木茂さん(故人)がうれしそうに話してくれたのを思い出す。

(野)

【データ】▽桐生倶楽部▽桐生市仲町二丁目9の36、電45・2755、社員外でも社員の紹介か、理事者の承認があれば有料で利用可能▽5号室―定員7人。半日1600円、午前9時から午後5時まで23000円、午後5時から9時まで18000円(冷暖房費、厨房へちゅうぱうく使用料など別途要)。

30年ほど前、参考にするようにと、牧島要一氏から保倉一郎さん

「桐生倶楽部写生画」 牧島要一画

「西久方町」がもらった写生画。このような下絵の写生を数点は試みて、それから本制作にかかるのが普通だった」と保倉さん。同館の裏から見た風景画(1936年作)の下絵の一つと推定される。



牧島氏から修復方法も学んでいた保倉さんが汚れなど取り除き、2008年に同館に寄贈した。